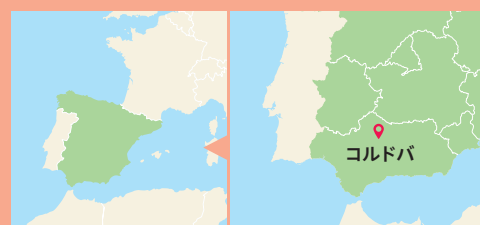




スペイン・コルドバ 研究滞在記

東京理科大学 創域理工学部 生命生物科学科 講師 ^{あらぞえ たかゆき} 荒添 貴之

CORDOBA



滞在地 スペイン／コルドバ

在外先 Universidad de Córdoba

滞在期間 2025年5月1日～
2025年7月28日



ラボがある研究棟

海外で研鑽を積みたいと考えていたのですが、様々なライフイベントやCOVID-19パンデミックの影響もあり、長い間その機会を逸していました。そんな中、短い期間ではありますが、本制度のおかげで海外研究活動の機会を得ることができました。本滞在記では、出発前から帰国までを振り返りながら、スペイン・コルドバの魅力を紹介していきたいと思います。

出発前から到着まで

筆者が主宰するラボが、在外研究に出発する1ヶ月前に立ち上がったということもあり、職務に追われて準備は遅々として進みませんでした。あまりの多忙さから出発までの記憶がほぼありません。そんな中でも、子供達と数ヶ月間会えなくなることへの寂しさや、学生時代以来となる一人暮らしに対する不安、念願の海外研究活動への期待が入り混じった複雑な感情を抱いていたことはよく覚えています。後にこの時の準備不足が様々なトラブルの原因となるのですが、出発当日に慌てて準備をして飛行機に飛び乗り、ドイツのミュンヘンを経由してスペインの首都マドリードに到着しました。コルドバはスペイン南部のアンダルシア地方に位置しており、スペイン中央部に位置するマドリード・アトーチャ駅からコルドバ中央駅までは、高速列車で2時間弱程度かかります。筆者のあまりの準備不足を案じて教員宿舎の予約から詳細な移動経路まで、細やかに手配をしてくださった Antonio di Pietro 教授の協力もあり、出発から30時間以上の旅路を経て無事宿舎に辿り着くことができました。しかし、ここで出発前の準備不足の問題が露呈することになりました。まず宿舎の建物名や案内が全てスペイン

はじめに

筆者は東京理科大学の「在外研究員制度」を利用して、スペイン・コルドバ大学の Antonio di Pietro 教授のラボに約3ヶ月間滞在しました。学生時代から





宿泊していた宿舎

語で書かれており、受付がある建物を見つけるのにも苦労しました。受付の方が翻訳アプリを駆使して丁寧に説明してくれたため、なんとか部屋に辿り着くことができましたのですが、インターネットへの接続には大学のアカウントが必要で、スペイン語で書かれた部屋・設備の利用案内も、スーパーの商品説明もほとんど理解できませんでした。これらの問題は、あらかじめ大学間で利用できる国際ネットワークローミング (edu-roam) やオフラインでも使用できる翻訳アプリをインストールしておけば回避できたことです。国際学会への参加など短期滞在とは異なる「生活」としての重みをまざまざと実感し、長旅の疲れも相まって、初日から深い徒労感と絶望感に包まれました。

歴史の街コルドバ

到着直後からスペインでの生活に少しナーバスになっていた筆者ですが、そんなネガティブな感情はその後一瞬で吹き飛びました。私が滞在していたコルドバは、キリスト教・ユダヤ教・イスラム教の3つの宗教が織りなす芸術・文化・伝統・歴史が、10キロ圏内に凝縮された美しい歴史の街です。中でも1984年に世界遺産に登録されたメスキータは、イスラム建築とキリスト教の聖堂が同居するコルドバの象徴です。メスキータが建てられたのは8世紀ですが、10世紀

までに何度か拡張されて大モスクとなり、その後13世紀にコルドバを奪還したキリスト教徒が、メスキータの一部を聖堂に建て替えたことで、異なる宗教の建築が混在する特異な建造物が誕生しました。加えて、イスラム王の宮殿跡に建てられたアルカサル城や、白壁が続く旧ユダヤ人街などのコルドバ旧市街も1994年に世界遺産として拡大登録されています。この情緒溢れる歴史地区は筆者の宿舎からも徒歩圏内で、週末になると毎週のようにランニング (実態はほぼ徒歩) で美しい街並みを散策してリフレッシュしていました。

このコルドバの街が1年で最も輝くのが、ちょうど筆者が渡航した5月で、3つものお祭りが1ヶ月の間に連続して続きます (それに合わせて滞在プランを組んでくれたようです)。ただ、ほとんど事前調査をしていなかった筆者は、この情報もラボメンバーから教えて貰うまで把握できておらず、4月末から5月の頭にかけて開催された十字架祭り (花で作った十字架の美しさを競い合うお祭り) については見逃してしまいました。2つ目のお祭りが5月頭から半ばにかけて開催されるパティオ祭りです。コルドバはスペインのフライパンと称されるほど非常に暑い地域なので (8月は50度を超えることもあるそうです)、パティオ (中庭) で暑さを凌ぐ風習があります。このパティオの美しさを競うのがパティオ祭りです。2012年にユネスコの世界無形文化遺産にも登録されています。外壁いっぱいに飾られた鉢植えのカラフルな花がとても印象的で、この期間はパティオの場所が記された地図を片手に、街歩きを楽しみながらパティオを見て回れます。3つ目のお祭りはフェリアと呼ばれるもので、アンダルシア地方各地で開催されているようです。コルドバでは5月末に街から少し外れたエル・アレナルと呼ばれる会場に大きな入場門が設置され、その奥に仮設のお祭り小屋が立ち並びます。このお祭り小屋の中で連日に渡り朝まで飲んで踊り狂うといった、日本人にはあまり馴染みのないお祭りですが、筆者もラボメンバーと一緒に参



対岸からみた歴史地区とローマ橋



メスキータの聖堂



ユダヤ人街



パティオ



フェリアの様子

バーとの議論に費やし、かつその時間を心から愉しんでいたことです。筆者との対話も、些細な研究に関する問いかけから始まり、気づけば数時間、時には1日中「こういったアプローチはどうか、こ

加して異国文化を大いに楽しむことができました。ただ、連日フェリアに参加するラボメンバーからのお誘いは、筆者の体力の限界もあって遠慮させていただきました。

これらのお祭りは、コルドバの華やかさを象徴するものですが、ラボメンバーやコルドバの人々の穏やかさ、明るさ、気さくさ、親切さ、大らかさには大変感銘を受けました。みなさん笑顔で挨拶する習慣をとっても大事にされていて、筆者が利用していたスーパーの店員さんは、仕事をしながらよく大きな声で歌っていました。上述したように、筆者は簡単なスペイン語もろくに話せない状態で渡航しましたが、コルドバの人々は様々な場面で嫌な顔一つせずに、いつも親切に対応してくれました。今回の滞在記で紹介した内容以外にも大小様々なトラブルに見舞われましたが、このような幻想的で美しい街並みと人々の温かさは、家族と離れて異国の地で暮らす寂しさや不安を消し去り、刺激的で穏やかな日常を提供してくれました。

コルドバ大学での研究生活

筆者は微生物遺伝学（応用微生物学）を専門としており、滞在先の Antonio di Pietro 教授はこの分野における世界的権威の一人です。これまで数々の一流雑誌に研究論文を発表しており、筆者はかねてから Antonio di Pietro 教授の大ファンでした。元々共同研究関係にあったことから、今回の筆者の滞在を快く承諾してくれました。筆者がちょうどラボを立ち上げるタイミングで、Antonio di Pietro 教授がどのようにラボを運営しているのか、またどのような研究活動から素晴らしい研究成果が生まれるのかを間近で体感できたことは、研究室を主宰する身となった筆者にとって得難い経験となりました。

滞在中にとっても感銘を受けたのは、Antonio di Pietro 教授がラボにいるほぼ全ての時間をラボメン

の結果はこういった意味を持っているのではないか、この結果をどう解釈しているか」といった議論や意見交換をすることも多々ありました。帰宅して夕食をとりながら、その日の議論の整理や情報収集に没頭していると「今日の議論の中で話題になった論文を読んだ、明日話そう!」といったメールが送られてくることもあり、次の日の朝の電車からアップデートした知識をもとに議論の続きが始まりました。筆者が滞在中は、実験している時間や出張時を除き、このような思索の連続が日々繰り返されました。これは他のラボメンバーとも同様に、今後の共同研究を含む実験アプローチやアイデアが次々と生まれてきました。このように、ほぼ全ての時間を研究に充てられるのが在外研究の醍醐味です。そして真理を追求する対話こそが研究者にとって本懐であり、いかに幸福な時間であるかを改めて深く胸に刻む機会となりました。

このような研究に関する議論以外にも、先方の高度な実験手法を見せて貰うことや、筆者らが進めてきた独自の手法を共有すること、また筆者自身が実際に手を動かすことで問題の解決を試みる実験などにも取り組み、双方向での有意義な研究交流ができました。ラボメンバーはみな一様に親切で、実験機器の使用方法から日常生活の困りごと、さらには遊びのお誘いまで、いつも筆者を支えてくれました。隔週で行われるラボミーティングや他大学との研究発表会、月1回開催される学科全体でのセミナー（UCO BR Seminar）にも参加し、筆者自身も自己紹介を兼ねた研究紹介に始まり、UCO BR Seminar での講演、そして滞在最終週での研究成果報告といった計3回の発表機会を得ました。特筆すべきは、いずれの場においても発表時間を上回る質疑応答が交わされたことで、コルドバ大学の研究者や学生がいかに研究熱心なのかがわかります。アンダルシア地方には、コルドバの他にもグラナダやセビージャ、マラガといった観光名所がいくつもあり、コルドバからはポルトガルにも足を伸ばすことができ



ます。滞在最終週にこれらの観光地を巡る計画を立てていたのですが、結局ドイツへの出張時に一泊したマドリードでの観光を除き、文字通り研究漬けの毎日で在外研究の幕を閉じました。

スペイン・コルドバの食文化

スペインバルは日本でも馴染みのものとなりつつありますが、スペインバルに代表される食の数々は滞在生活に彩りと奥行きを与えてくれました。コルドバは食べ物が美味しい美食の街としても知られています。ここでは、スペインの食文化やコルドバの郷土料理について紹介していきます。

スペインではランチタイムが14時頃から、ディナータイムは20時頃からと、日本人の感覚からするとどちらもかなり遅めです。そのため、ランチまでの間に軽食をとる人も多く、Antonio di Pietro 教授も11時頃から大学のカフェでコーヒーを飲みながらトーストを食べるとするのが習慣でした。そのため、朝から議論が続いているような時には、大学のカフェに移動し、軽食をとりながら話をすることもありました。またランチは一日の食事の中で最も重要で、ボリュームがあることが多いです。筆者の歓迎会を開いてくれた際にも14時頃から日本での飲み会（ディナー）のような感覚で、杯を交わしながら食事を楽しみました。この時期のスペインは22時頃まで明るいので、レストランでの食事を終えて2次会、3次会へと移動してもまだ明るかったことが印象的でした。前述したように、コルドバはとても暑い地域で、6月には30度後半、7月には40度を超える日も少なくありませんが、日本と比較すると湿度がとても低いので、日陰であればそこまで暑さを感じません（40度を超えると流石に少し暑いですが）。街中ではテラス席も多く、そんなカラッとした気候の中で、色彩豊かなスペイン料理（タパス）を傍に飲むスペインビールは、まさに至高の一杯でした。

タパスはスペイン発祥の小皿料理を指し、オリーブや生ハムなどの冷製ものや、イワシのマリネやタコのガリシア風といった魚介系、チキンやミートボールなどの肉系など、種類が豊富でどれもお酒のつまみにぴったりです。筆



タパスとビール

者はバスと電車を乗り継いでラボに通っていたのですが、仕事終わりに駅前のバルでビールと共にタパスを食するのが楽しみの一つでした。生ハムやトルティーヤ（スパニッシュオムレツ）などのいくつかのスペイン料理はスーパーでも購入することができ、毎晩の晩酌に欠かせませんでした。

これらの代表的なスペイン料理に加え、コルドバにはいくつかの郷土料理があります。筆者が特に気に入ったのが、トマトの冷製クリームスープ「サルモレホ」と、牛テールの赤ワイン煮込み「ラボ・デ・トロ」です。サルモレホはスープというより濃厚なトマトピューレといった感じで、酸味がありつつもクリーミーな味わいは、暑いコルドバでも食欲を引き立てます。スーパーでもペットボトルのような形で売られていて、筆者は毎朝サルモレホを飲んでいました。またレストランで味わったラボ・デ・トロは、時間をかけてじっくり煮込んだ牛テールに旨みが濃縮されており、その力強い味わいとスペインワインとの相性が抜群でした。意外と知られていませんが、コルドバはイベリコ豚を使用した最高級生ハムの名産地です。ラボメンバーから貰った自家製の生ハムは塩気がほどよく、まろやかな脂が馴染んだ、なんとも濃厚な味わいでした。そもそも実家で生ハムが作れることに驚きですが、コルドバの温かな記憶として脳裏に焼き付いています。



サルモレホとラボ・デ・トロ



自家製生ハム

おわりに

今回の執筆にあたり、当時の記録や記憶をあらためて振り返るなかで、この滞在が多くの方々に支えられた幸福な時間であったことを再認識しました。不在の間、研究室の運営や講義、事務作業を担当して下さった東京理科大学のみなさま、素晴らしい滞在環境を提供して下さったコルドバ大学のみなさま、そして在外研究を承諾し、協力してくれた家族に対し、この場を借りて心よりお礼申し上げます。